

キラキラネーム

最近、日本人の先生たちは新たな授業の生徒に会うと、混乱状態になってしまう。なぜだろうか？経験があれば、仕事できるはずである。しかし、教え方ではなく、学生たちの呼び方を理解するのが問題なのだ。現在、「キラキラネーム」という名前が増加の一途をたどっているので、子供たちの漢字は意味も読み方も理解不可能ほどになっている。

90年代以来、親たちはだんだん名前に關して意味や読み方より、音の方が大事だと思い、自分の子供に「一般的」ではなく、「ユニーク」な名前を付ける。少し想像してほしい。ある先生は教室に入り、出席するため名前のリストをチェックし、「心」を見て「しん」と言う。しかし、違う——「しん」ではなく、「はあと」だと言われる。そして、次の子は「花子」（はなこ）ではなく、「ふらわあ」だ。他の名前にも変わった読み方があれば、先生には覚えにくい。

変わった意味もある。「獅王」（れおん）の意味は読む通り「ライオン・キング」の映画が頭に浮かぶでしょう。そのような重要な名前を持てば、重荷になるかもしれない。同じく、「王子様」という名前を持つ子は親からも周りの人々からも大きなプレッシャーを感じる可能性がある。一方、プレッシャーより、自分の名前にとても不安も悲しみも感じる名前もあるかもしれない。例えば、「ゆめ」や「ここな」はすごく素敵な音を持っているが、「遊女」（セックスをするためにお金をもらう支払う女）と「心中」（恋人同士の自殺）の漢字でその名前を書けば、まるで児童虐待である。

「キラキラネーム」を持つ子供は、小さいころいじめられる可能性が高い。もしも、大人になったらまだ心の健康よくても、就職活動が大変になるかもしれない。変な読み方や意味を持つ名前を見る雇い主は差別する可能性がある。

結論として、これから名前をもう少し法で規制されていくべきだと思う。特に、よくない意味を持つ名前が禁じられるべきだ。常識の範囲内、変わった読み方は社会の進化

を表すので、大体いいと思うが、失礼な意味を持つ名前の言い訳はない。親たちは子供の幼いころにも大人のころにも配慮するべきだ。